

## 日本人の知の極限值・南方熊楠

前坂 俊之(静岡県立大学国際関係学部教授)

〔比類なき「知の巨人」〕



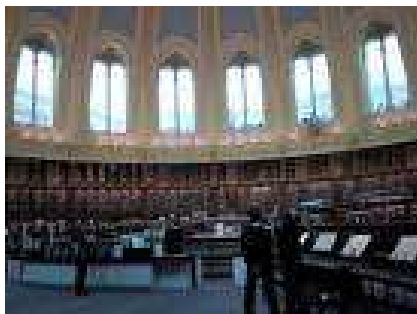
柳田国男は南方熊楠を「日本人の可能性の極限」と評したが、確かに熊楠は二十世紀最大の「知の巨人」である。

百年以上前にロンドンの大英博物館を拠点に世界中の情報を集めて、英語で多数の論文を発表した。

故郷の和歌山県田辺に帰った後も、生涯田舎に住んで個人として自由に研究し、世界に情報を発信し続けた。インターネット WEB を駆使できる現代の学者たちにも、熊楠に比肩する人物はいない。

一八九二年(明治二十五)九月、熊楠は米国を放浪してから英国に渡った。そしてロンドンに住み、大英博物館にこもって猛勉強する。当時、世界中の研究者がここを研究の場としており、カール・マルクスが有名な『資本論』を書くために日参したのはこの約三十年前であった。

熊楠も日参して、マスターした十数カ国語を駆使して世界中の図書、稀稿本、古書などの詳細なノートをとった。



世界で最も権威のある自然系科学雑誌『ネイチャー』(一八九三年九月 30 号)の投稿欄に「東洋の星座」を発表し、『タイムズ』などの新聞で賞賛され、一躍有名になった。

<写真上は大英博物館図書室>

一八九四年から翌年にかけて『ネイチャー』や『ノート&キリーズ』などの雑誌に精力的に寄

稿し、各国の学者との交流が一挙に広がった。

寄稿はすべて英語論文で、「世界の学者を相手にしたもので、日本人は誰も読まないものかもしれない」と書いている。

<写真下は南方熊楠記念館>



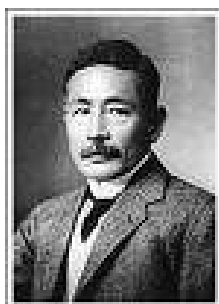
熊楠は大英博物館館長フランスに、同館を自由に出入りできるという前例のない特別待遇を与えてもらい、約六年間「日本書籍目録」づくりに貢献した。

しかし二度の暴行事件などを起こして、同館を追放される。ロンドン大学総長ジキンスの奔走で、ケンブリッジ大学に日

本学講座を開設して、熊楠を助教授に採用して、長く英国にとどめて置く計画もあったが、結局、ポーア戦争などの影響で立ち消えになる。

もし、これが実現していれば、日本人初の世界的な大学教授の第一号となっていたことであろう。

〔 対照的熊楠と漱石 〕



明治三十三年（一九〇〇）九月に熊楠は約十四年ぶりに神戸港に帰国する。すれ違いで文部省留学生の夏目漱石が神戸からロンドンへ向かった。

熊楠と漱石は同じ年で大学予備門の同期生だったが、性格、行動、研究態度は対照的であり、特にロンドンでの生活ぶりは正反対であった。



漱石は西洋文化にカルチャーショックを受けて神経衰弱になり、部屋に閉じこもった。コンプレックスから英国人の教養のなさを軽蔑して、周囲の英国人とのコミュニケーションもほとんどなかった。

大英博物館図書館に行くことも一度もなかったが、帰国後は東大英文学の教授に就任して、陽のあたる道を歩む。

一方、熊楠は当時の日本人が陥りがちだった西洋文明への劣等感など皆無で、逆に東洋人でありながら世界を見聞して西欧にも通じていた優越感があった。



同館で初めて会った孫文に「あなたの一生の目的は」と聞かれて「東洋人が一度西洋人をことごとく国境外に放逐することだ」と同席していたダグラス部長の前で豪語して驚かせたほど、自信とプライドにあふれていた。

<写真上は孫文>

### 〔百年先を見通した『南方学』〕

熊楠の研究分野は文学、民俗学、論理学、心理学、歴史など多岐にわたり、フィールドワークで採集した隠花植物、菌類、藻類の整理、標本作りを日課にしていた。

十九世紀末の生物学の関心は生物の起源に向いていた。熊楠は粘菌が動物と植物の境界にあり、生物の原初的な形態と考えており、現在のライフサイエンス研究の先駆けでもあった。

熊楠の博覧強記について、これまで学会や専門家からはガラクタ的な知識の寄せ集めであり、『南方学』には全体を貫く理論が欠如しているという批判が出されていた。

しかし、明治三十六年（一九〇三）、高野山管長の土宣法竜への手紙で、古代真言密教の蔓荼羅と西欧科学の方法論の因果律を深く考察して、仏教の「因縁」の因は因果律（必然的法則）のことであり、縁は偶然性であると指摘して、偶然性という概念を提出しその重要性を指摘している。

科学的な方法論で偶然性が重要な問題となり、ポア、ハイゼンベルグらの理論物理学者が量子力学を完成させたのは一九三〇年代であり、偶然性の概念に関するジャック・モノーの名著『偶然と必然』が刊行されたのは一九七〇年である。

熊楠の思考はそのるか以前。熊楠の曼陀羅論、思想は時代を百年も飛び越えて、二十一世紀に進んでいたのである。

<http://www.u-shizuoka-ken.ac.jp/~maesaka/>

禁転載